

③ 三句切れ (木下利玄) 5・7・5 / 7・7

牡丹花は咲き定まりて静かなり / 花のよめたる位置のたしかさ

④ 四句切れ (石川啄木) 5・7.5・7 / 7

はたらけどはたらけど猶わが生活楽にならざり / じっと手を見る

【5】書き方について

表記の仕方ですが、5・7・5で切って、7・7と分けて書かないほうがいいでしょう。一行で書き下し、原稿用紙の下までいったら次の行に書く、そういう書き方がいいでしょう。

ついでに言いますと、場合によっては、歌の中にカッコとか句読点とかをつけてもいいでしょう。

「このあじがいいね」と君が言ったから7月6日はサラダ記念日
きゅうくつに考えないで、このへんは自在にやってくれていいか
と思います。

【6】テーマを与える

最初は、テーマ、あるいは題を与えるのがいいかと思います。題は、何でもいいのですが、人事と自然、一つずつ。二首作らせてもいいし、好きな方を選ばせてもいいかと思います。

【7】発見の大切さ

どんなに小さい発見でも、自分で見つけて欲しいのです。「地球に学ぶ」から例を引いてみましょう。

① 運河沿い西風受けてゆっくりと水を汲み出すオランダ風車

(アムステルダム日本人学校 太田博子)

この歌の中で「西風うけて」、「ゆっくりと水を汲み出す」が作者の発見です。

② 砂漠には草はあるけど水は無い燃えるような砂たえている草

(ドバイ日本人学校 樋笠健郎)

砂漠には草はないと思っていたのですね。それが違っていた。敏感に驚いている柔軟な心を育ててほしいですね。

【8】表現は具体的に

一つの発見を短歌で表現するとき、具体的に書くことが大切です。

① エミリーは小さなまげにさして赤い輪島のぬりばし二本

(ワシントン補習授業校 今野みずき)

輪島塗の箸をかんざしにしている。「ちいさなまげ」「赤い」「わじまぬりのはし」がいい。

② ブラジルのコーヒー農園山すそに赤と黄色の実をほしている

(ヴェトリア日本人学校 越智和敏)

「山すそ」「赤と黄色の実」作者の発見でしょうね。

【9】季節・時刻を入れる

俳句には季語があります。短歌にはそういう約束はない。しかし、同じ原理で、時間、空間を限定する語句をいれると、たいへん効果的です。

① 再びは来ることもなきリオの海よ八月半ばの日記をしるす

(ブエノス・アイレス日本人学校 宮沢和子)

「八月半ば」という時期が出てくる。最後の夏休みでしょう、カーニバルなどの背景も浮かんできます。

② 夕方のタンジョンアールは引き潮で蛤拾う人々の影

(コタ・キナバル日本人学校 高島絵里奈)

「夕方」という語があるために「人々の影」がずうっと長いことが想像されます。

【10】言葉の冒険 擬音語、色彩語など

最後に「冒険」。まず、言葉の冒険。たとえば擬音語、擬態語などはどうでしょう。これを上手く使って、面白い味を出している作品がときどきあります。

① ギンギンとまぶしく光る太陽でマロニエまでも汗をかいてる

(ブダペスト補習授業校 三浦順子)

この作の「ギンギンと」は、暑い太陽の感じをうまく表現しています。なかなか印象的です。

② ゴムの木がびしっと整列並んでるゴムの木生徒だれが先生

(ジャカルタ日本人学校 鈴木方子)

下の句のユーモアがこの歌の核心ですが、そのユーモアを活かしているのは「びしっと整列」です。この部分が伏線になってユーモアが活かされるのです。

日本の詩歌史の中で、擬音語といえば小林一茶と宮沢賢治です。彼らは意識的に擬音語に興味を示し、大胆に冒険しました。例えば一茶。

- 白魚のどっと生まるるおぼろ哉
- 雪とけてクリクリとした月よ哉

【11】色彩を楽しめます。

もう一つ。色彩を意識的にうたい込むという冒険はどうでしょう。

① 真っ白なギリシャの家の青いドア日焼けの子どもの顔が飛び出す

(アテネ日本人学校 武井雅彦)

ここでの作者は、きっと効果的に色彩をうたおう意識しているはずです。ちょうど画家が絵を描くときのように、「白い家」「青いドア」「黒い顔」の色彩的コントラストを頭に描いて、それを表現している。見たものをそのまま写すように書くのではなく、短歌というキャンバスにどういう色を表現しようかと考えている。表現とは冒険なのです。

② 上海は街一面に緑色ホテルのレンガ突き抜けて赤い

(上海日本人学校 北原直人)

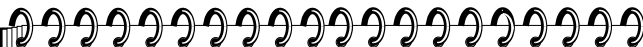
上海の特色を、他のものはみな省いて色彩だけで表現しています。「つきぬけて赤い」といったのは大したものですね。

③ ラプラタに始まる朝を包み込む霧の紫窓から香る

(ブエノスアイレス日本人学校 加古洋子)

「霧の紫」という表現は、相当大胆な冒険的表現ですね。

短歌を作るときまだ使ったことがない言葉も使ってみる。いうまでもなく言葉は、使ってみてはじめて自分のものになるのです。もし短歌づくりが、初めての言葉の使用の契機になれば、これは楽しいに違いありません。自分で短歌を作るようになると、古典の短歌にも関心がたかまります。短歌をとおして、どうぞ日本語を楽しんでください。



海外・帰国子女教育専門機関 JOBA

〒145-0064 東京都大田区上池台 3-39-9

TEL : 03-5754-2240 FAX: 03-5754-2241

HP : www.jolnet.com



張江 幸男 (はりえ ゆきお)

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問

前全日本空輸(株)海外子女教育相談室長、元三菱商事(株)相談室長、元ニューヨーク日本人学校校長、元台北日本人学校教頭



短歌の作り方、そして楽しみ方の具体的な紹介です。海外の子ども達の作品もたくさん紹介していただきました。

このコラムを見せて、お子さんにひとつ気に入った作品を選んで、「同じようなものを作ってみたい」と誘いかけてみてはいかがでしょうか？ もちろん、お母さんもひとつ作ってみては？